

卓越大学院プログラム 平成30年度プログラム実施状況報告書

採択年度	平成30年度	整理番号	1814
機関名	長崎大学	全体責任者（学長）	河野 茂
プログラム責任者	北 潔	プログラムコーディネーター	有吉 紅也
プログラム名称	世界を動かすグローバルヘルス人材育成プログラム		

<プログラム進捗状況概要>

1. プログラムの目的・大学の改革構想

○プログラムの目的

グローバル化が進行する中、新興・再興感染症をはじめとする疾病・健康不安が、途上国・先進国等を問わず地球規模課題となり、国際社会が協調して課題解決に取り組む「グローバルヘルス」の推進は、我が国に真の安全と安心、経済発展をもたらすとともに、国際社会における我が国のプレゼンスを高めることにもつながる。グローバルヘルスを推進できる卓越したリーダー育成のニーズは国内外を問わず高まっている。

本申請プログラムは、グローバルヘルス領域でロールモデルとなる多くのトップレベル教員を擁し世界最高峰に位置する英国ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院（LSHTM）との緊密かつ有機的なパートナーシップの下、長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス（TMGH）研究科を中核母体とした先進的な学位プログラムを構築し、“世界を動かし地球規模の健康課題を解決できる真に卓越したグローバルヘルス人材”を少数精鋭で育成するものである。具体的な卓越人材像は、地球規模で生じている健康課題を現場レベルで深く理解し、その解決に向けて技術や理論を構築できる教育・研究能力を有するとともに、学術的知見をグローバルな政策立案・実行等に結び付ける能力を兼ね備えた実践的・社会的リーダーである。（調書P.5）

○大学の改革構想

本卓越大学院プログラムは、本学の世界的教育・研究拠点の人材育成面における中心戦略に位置付けられ、学内の既存研究科横断的な教員組織を構築する点、当該領域において世界のトップに位置するLSHTM とのJoint PhD 制度を採用する点で、きわめて先進性の高い取組みである。

この目標を達成し高度な「知のプロフェッショナル」を育成するために、学長の下に新たに「大学院改革推進会議」を創設し、そのリーダーシップにより、社会のニーズに適切かつ戦略的に対応できる新しい学位プログラムの機動的な構築を可能にする大学全体の大学院システム改革を断行する。改革の主要なポイントは、(1)従来7研究科に閉じた縦割りの教員組織に横ぐしを入れ生命科学、理工学、人文社会科学の3学域に大括り化すること、(2)自前主義を排し大学の枠組みを超えた他教育・研究機関との有機的な協働による学位プログラム（Joint PhD を含む）の構築を可能にすること、及び(3)予算や人員等の学内資源の本プログラムへの重点配分を可能にし、将来にわたる継続性を担保することである。この大学院システム改革は、本プログラムの目

標達成にとどまらず、他領域における高度な知のプロフェッショナル育成のための学位プログラム創設にも波及することで、本学全体の将来構想実現に向けた強力なドライビング・フォースとなる。（調書P.10）

2. プログラムの進捗状況

①11月～3月 2019年2月にグローバルヘルスプログラム運営委員会、同年3月に大学院改革推進会議及び卓越大学院運営委員会の組織を整備（規則制定含む。）し、各委員会等に学長の強いリーダーシップを発揮できる委員を配置した。また、同年2月1日に、連携先となるロンドンでの就業経験を有し、高い英語力を持つ事務補佐員を雇用した。

②3月 LSHTMが有する世界トップレベルの講義を聴講可能とするため、LSHTMが導入している講義配信システムと本学のシステムを連携させ、自宅や職場等においてWeb上で受講することが可能な環境を整備した。また、日本と英国の著作権等に関する問題をクリアするため、当該講義配信システムにおいて高度な編集が可能となるシステムを導入（ノンリニア編集機）した。
既存のパソコン教室を活用し、中央サーバーによる集中管理が可能なシステムを導入し、効率的な統計学演習が行える環境を整備した。

③3月 本卓越大学院プログラムは複数研究科に跨がるプログラムであり、研究科によってはキャンパス自体も離れているため、参画する研究科にテレビ会議システムを導入し、円滑なコミュニケーションがとれる環境を整備した。

④3月 マルチディスカッションが可能となる顕微鏡システムを導入し、さらに各種検体を作成するための遠心分離器及び恒温チャンバー並びに寄生虫等の検体を保管するための冷蔵ショーケース、安全キャビネット等を整備したことにより、卓越大学院プログラムのレベルに則した、高度な研究指導が可能となる環境を構築した。

⑤11月～3月 2018年度の卓越大学院プログラム学生(5名)に対してそれぞれ複数の指導教員から構成される研究指導チームを構築した。研究指導チームには可能な限り専門分野が異なる教員を配置させ、多角的な知見による課題解決型の指導を実施した。

⑥11月～3月 2019年1月より、LSHTMの著名な教授（研究科長クラス）2名と、本学とLSHTMの教育研究のコーディネートに特化する助教をクロスアポイントメントで雇用した。LSHTMの教授2名は本卓越大学院プログラムの運営委員会の構成員として参画し、教育研究のみならずガバナンスの面においてもプログラムの卓越性の維持・発展に貢献した。

⑦3月 2019年3月に卓越大学院プログラムに特化したホームページを開設した（<http://www.wise.nagasaki-u.ac.jp/>）。また、同年3月9日～10日にキックオフシンポジウムを開催し、LSHTMを中心とした国内外の著名な講演者（35名）によるセミナーを実施した。当該シンポジウムには17社のグローバル企

業等も参加し、日英のアカデミアとの連携を促進した。キックオフシンポジウム等による時間的な制約により、正式な外部評価委員会は開催できなかったが、4年後の中間評価を見据え、本卓越大学院プログラムのアドバイザーとなるLSHTMの著名な教員から、グローバルスタンダードな教育研究、そして運営体制等の助言を受けた。

⑧11月～3月 2018年度の卓越大学院プログラム学生（博士後期課程）5名について、2018年11月から2019年3月の期間、教育研究支援経費を支給した。独創的な教育研究活動のための経費については、初年度ということもあり、卓越大学院プログラム学生もプロポーザル作成時期であったため、2018年度の支給は行わなかった。なお、本卓越大学院プログラムの中核となるLSHTMとのジョイントディグリー専攻においては、教育研究支援経費による支援や、世界レベルの教育研究を展開することから、世界各国から出願があり、2019年度入試の志願倍率は5.6倍と非常に高いものとなった。この志願者の中から2019年3月に5名の極めて優秀な学生を選抜した。

【平成30年度実績：大学院教育全体の改革への取組状況】

・本事業を通じた大学院教育全体の改革への取組状況、及び次年度以降の見通しについて

3月に大学改革推進会議、卓越大学院運営委員会及び学位プログラム改革委員会の組織を整備（規程制定含む。）し、各委員会等に学長の強いリーダーシップを発揮できる委員を配置した。当該委員会において、本卓越大学院プログラムに続き、他の研究科が中心となって展開する研究科横断型の教育プログラムや、工学研究科及び水産・環境科学総合研究科における複合型学位プログラム等、複数の横断型プログラムの構想について、検討を開始している。